

国楽を取り入れた音楽科授業における実践

前ソウル日本人学校 教諭

岩手大学教育学部附属小学校 教諭 菊池 真理子

キーワード：サムルノリ，ノンアク，音楽教育，国際交流，ソウル

1. はじめに

ソウル日本人学校には、「コリアクラブ」という韓国の文化に触れるクラブがあり、そこでは伝統楽器の演奏も行っている。その活動のため、チャングの伝統楽器が数多く備品としてあり、多数で同時に行う教材学習にも対応できる環境にある。ソウルの街中では、様々な広場でサムルノリの演奏をしている機会に恵まれる。観光の1つでもあるが、毎年大会も行われ各地域の様々な伝統芸能のコンクールも行われるほどの力の入れようである。この中でも、4種類の打楽器で構成される「サムルノリ」は日本の楽器にも似ており、親しみやすい。この「サムルノリ」を音楽の授業で取り上げ、体験することで、異文化理解にもつながるのではないかと考えた。



以前、中国の北京大学附属小学校で、音楽の授業をする機会があった。言葉は通じないが音楽そのものが共通語であり、リズムそのものが共通語である音楽は、通じるものがあることを実感した。

今回は、ソウルでの日本のカリキュラムの中に、韓国の伝統楽器を取り入れて学習ができないものかと試みた。その実践を紹介したい。

2. 韓国の国楽について

ソウルのアートセンター（イエスレチョンダム）芸術の殿堂という施設がある。ここには、オペラ、オーケストラ、様々な目的に応じたコンサートホールが一箇所に集まった施設がある。中でも韓国では国楽は保存、継承していくことが国としても重要とされている。その国楽にふれるために、外国人を対象とした3ヶ月間の韓国楽器の講習がある。毎週1回、3時間の授業で、最後には発表会も開かれる。その講習に参加し、楽器の基礎を学んだ。チャングとサムルノリ（打楽器アンサンブル）の2講習を受ける機会をいただいた。

チャングの講習では、チャングの基礎的な奏法から、リズムパターンまた、地方に伝わる様々な種類の演奏を行った。サムルノリの講習では、チャングの発展的なリズムパターンから、ブク・銅鑼・ケンガリの全部で4種類の楽器を交えながらアンサンブルを行った。

3. 授業での実際

(1) 6年生における実践例

レッツ チャレンジ コリアン ミュージック♪

～～サムルノリのアンサンブルを通して～～の実践から

1、日 時 2009年11月9日(月) 第3時限(10:45～11:35)

2、学年・組 小学部6年松組(18名)

3、場 所 音楽室

4、指 導 観

(1) 児童の実態

韓国に住んでいるが、この国の音楽や楽器について観たり聴いたり、体験するということは少なく、中には、未体験の児童も半数いる。しかし楽器の体験や韓国の音楽にふれてみたい、やってみたいと思っている児童は少なくない。だからこそ学校でその体験をし、韓国の伝統楽器にふれる機会を設けることは、この国の伝統文化について理解するよいきっかけになるとと思われる。

(2) 教材観(題材について)

本題材は学習指導要領「音楽」『A表現2(4)に「エ 第5学年及び第6学年で取り上げる旋律楽器は、既習の楽器を含めて電子楽器、和楽器、諸外国に伝わる楽器の中から学校や児童の実態を考慮して選択すること。」「ア 各学年で取り上げる打楽器は、木琴、鉄琴、和楽器、諸外国に伝わる様々な楽器を含めて、演奏の効果、学校や児童の実態を考慮して選択すること。」楽器の選択に当たっては、中学年までに経験した楽器を含めて、児童の興味・関心、これまでの学習経験や技能、その演奏効果、学校の実情を考慮して適切なものを取り扱うようにする。その際、我が国の音楽や郷土の音楽、諸外国の音楽に対する関心を一層高めるように配慮することが必要である。』という項目に関連してしている。

高学年になると様々な音楽に触れる機会が多くなり、児童の音楽に対する見方・感じ方も広がってくる。教科学習の中でも、世界に目をむけた学習が織り込まれる内容が増えてくる。

世界の国々には、古くから人々が守り育ててきた独自の音楽があり、旋律の感じ、歌声の響き、楽器の音色などの様々な要素が一体となって醸し出す味わいは、それぞれの国ごとに異なる特徴をもっている。その独自の音楽の旋律の特徴や響きの違いを感じ取りながら聴いたり、歌ったりするとともに、身近にはなかなか見ることができない珍しい楽器に気づいて、その音色などにも親しむようにするとともに、他国の文化を尊重し、同時に我が国の音楽をも大切にしようとする気持ちを育てていくようにする。

朝鮮半島の国や中国と日本は文化的に深い関わりをもっている。朝鮮半島の国や中国から日本に伝わった文字、農業、宗教、陶磁器、音楽などは、日本の風土に合わせて独自の文化に発展してきてはいるが、共通する文化は少なくない。

5、本学習の目標

(1) 音楽の雰囲気を感じとりながら、楽器を演奏する。

(2) 他の楽器も経験しながら、アンサンブルを楽しむ。

6、指導計画(1時間扱い)…音楽単元「世界の音楽に親しもう」で発展して行う。

7、本時の展開

児童の学習活動・予想される反応	指導上の留意点	評価とその観点
<p>Warm-up</p> <p>1、日本の伝統音楽と韓国の伝統音楽を聴く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共通点 ・両面を使う ・桴でうつ <p>2、学習課題の把握。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2曲を比較して鑑賞し、韓国の音楽がもつ独特の響きやリズムの特徴に気づくようにする。 ・音楽の特徴となっている楽器や似ているところを探すようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・どちらがどの国かイメージを膨らませながら、鑑賞することができたか。
<p>レッツ チャレンジ コリアン ミュージック!!</p>		
<p>3、楽器・楽譜について知る。</p> <p>4、楽器のリズムを歌唱する。</p> <p>5、グループに分かれて演奏する。</p> <p>6、アンサンブルで演奏する</p> <p>＊時間があったら組み合わせを代える。</p> <p>7、まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感想発表 ・難しいと思ったけどできた。 ・みんなで合わせると楽しい。 ・次は違う楽器もやってみたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・リズムを理解しやすいように絵譜で提示する。 ・楽器の特徴については、簡単にふれる。 ・3拍子のリズムを刻み拍の流れにのりやすいようにする。 ・それぞれの楽器のリズムを視覚的に確認しながら練習できるようにする。 ・教師側のグルーピングで行う。 ・アンサンブルをするときに確実にを行うため、歌唱リズムではじめに合わせる。 ・一つの楽器より、みんなで合わせると楽しさが広がることを捉えさせるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・4つの楽器の名前について知ることができたか。 ・楽譜の記号について唱えることができたか。 ・拍の流れにのってリズムを歌唱できたか。 ・進んで楽器の演奏をすることができたか。 ・友達と合わせながら互いの音を聴き合って演奏できたか。 ・活動を振り返り、韓国の伝統音楽について考えることができたか。

8、成果と課題

本時では、導入で韓国のサムルノリと岩手の「さんさ踊り」の映像から共通点を探し太鼓の違いに気づかせることによって、韓国の音楽がもつ独特の響きやリズムの特徴に気づくようにし、音楽の特徴となっている楽器や似ているところを探すように計画した。授業研究会では実際に生の音で聴くことができるとよりインパクトが強く、響きや奏法においても気づきがあったのではないかと話題がでた。

数多くある韓国の伝統楽器の中でも、昔から伝わり地方によって異なる、サムルノリは日本の児童にも授業を通して体験することが容易で親しみやすい。音楽づくりは子どもが自らの感性や創造性を働かせながら自分にとって価値のある音や音楽をつくる活動であり、その活動を通して様々な発想をもって音遊びをしたり、即興的に表現したり能力及び音を音楽へと構成していく能力を高めるものである。そのような観点からも、他国の楽器にのの音楽づくりを実践できる教材として取り上げたことは有効であった。

(2) 3年生における実践例

3年生では、前年に行ったチャングの指導をもとに、4種類の楽器でのアンサンブルに取り組んだ。韓国に住んでいるうちに、この国の音楽に触れる機会を持つ事は今後の様々な分野に影響があると思われる。そこでチャングの個々の楽器にふれて、ノンアクの本来の意味である自分たちの固有の楽しみ（動き・リズム）をつくる学習を設定した。

導入段階では、韓国の独特のリズム（三分リズム 1拍をさらに細かく1・2・3と分ける）を歌とリズム打ちによって再確認する。

そして、前時に行った自分たちのノンアクをお互いに見合うことから、ノンアクの特徴を発見させる。またグループで発表することや、別のグループの発表を見合う活動を通して、「心を合わせる学習」を行った。学習の終わりには、韓国のノンアクを体験したことで、「もっと鑑賞したい。もう一度やってみたい。」という異文化理解につながる「ふりかえり」を行った。



4. 実践をふりかえって

チャングを通して、韓国の音楽にふれ、日本の音楽教材をより深く学習する機会に恵まれたことは児童にとっても意味深いものであった。また日本の音楽教育の中に、現地の楽器を取り入れて音楽を作る学習ができたことは、異文化理解にも大きくつながるよいきっかけとなった。

5. 韓日音楽セミナーについて

2年ごとに、韓国と日本で輪番で開催される「韓日音楽セミナー」という学ぶ会があった。赴任期間中に、建国大学を会場に開かれ、日本からは大学の先生、韓国ではソウル市内の先生が韓国の特にソウル市内では、放課後の音楽活動を進めていこうという動きがある。合唱活動は教会を中心にやられているものの、学校としての活動はまだ浸透していない。しかし先進的な地域では放課後の活動で、音楽面に力を入れていこうという動きがあり、サムルノリのクラブや、パンソリの活動を行っている。

研究演奏の部分でのサムルノリには本当に驚かされた。4人の小学生が演奏を始めた瞬間、その世界に入り込み、それは素晴らしい演奏を披露してくれた。感情に正直な国の人々だけに、音楽表現においても人の心を揺さぶる表現をすることはとても勉強になった。ここでは、韓国の伝統笛「短そ」とリコーダーの演奏技法比較のワークショップや、「韓国の音楽教育における示唆点」という演題でのシンポジウムが開かれた。

6. おわりに

たった、2時間しか離れていない国であるにもかかわらず、似ている部分と、違う部分があり、それらはその国で暮らす気候・風土が生み出したものからの現象である。音楽についても、ルーツは同じであってもその土地から生まれ、人々の暮らしが大きく関係して生み出されたものである。同じ形であっても湿気が関係あることによって、音の高さが変化し音色となって現れてくるものである。人々の暮らしが音楽の元になり、そして人々の暮らしを支えていくことになっていることを改めて感じた。